

大草原の風を感じて…

馬頭琴奏者 モンゴルのセーンジャー(賽音吉雅)さん

小学校の国語の教科書でも親しまれている「スーホーの白い馬」という作品に登場する楽器「馬頭琴」。この馬頭琴の演奏を通して日本で活躍しているセーンジャーさんに話をうかがいました。川崎市国際交流協会からの国際文化理解教育の講師としてもたくさんの小学校に出向き、素敵な音色を響かせていますが、その音色は9月23日(木・祝)に川崎市国際交流センターホールのコンサートで聴くことができます。



▲セーンジャー(賽音吉雅)さん(内モンゴル・ホルチン草原出身)

馬頭琴を始めたのはどんなきっかけですか？その魅力は？

子どもの時から父の馬頭琴が家にありました。しかし、馬頭琴はとても高価なものですので子どもには触らせてもらえませんでした。私は家に誰もいない時に、よく遊びで弾いていました。ある時、家族に「私、弾けますよ」と言って古い民謡を弾いて聞かせました。皆は、上手に弾いている私を見て、本当にびっくりしていました。

その後、13歳頃から、きちんと先生に付いて、習い始めました。その当時は、地元でも馬頭琴を習っていたのは私一人でしたが、今では日本の子ども達がピアノを習う感覚で、多くの子ども達が習っています。

馬頭琴の魅力は、音の高さが人間の声の高さに似ていることです。人と会話しているような音の高さが、聞いていて心地いいです。また、2本の弦が張られていますが、1本の弦が160～170本の馬のしっぽ(ナイロンの場合は120～130本)が集まったものなので、複雑な音色が出ることも大きな魅力です。

来日されたきっかけはなんですか？

内モンゴルでは、子どもの時から「北国の春」「荒城の月」「赤とんぼ」などの日本の曲に親しんできました。その日本で作曲の勉強をしたいと思い、来日したのがきっかけです。しかし、ピアノが弾けないと作曲の勉強はできません

でした。私は遊びでは弾きますが、習ったことがなかったため、作曲の勉強は断念しました。そんな時、友人の勧めもあり経済の勉強をすることにしました。その後、大東文化大学大学院在学中に国際交流のイベント等で馬頭琴を弾くようになりました。



川崎市(スーホーの白い馬の演奏など)での交流のきっかけはどのようなことからですか？

4～5年前に留学生のイベントで来ました。川崎能楽堂やプラザソルなどで演奏しました。また、(財)川崎市国際交流協会より小学生に馬頭琴の演奏を聞かせてほしいとの要望があり、年に数回講師として引き受けています。最初、私が子どもの時におばあさんから話してもらった「スーホーの白い馬」の話を日本の小学生が知っているのが本当にびっくりしました。日本の小学生は皆、私の演奏にとっても興味を示し、じっと聞いてくれます。そして日本の子ども達は恥ずかしがらず、私にモンゴルのことなどいろいろな質問をしてくれます。

今回の国際交流センターでのコンサートの見どころを教えてください。

馬頭琴とモンゴルを身近に感じてほしいです。また馬頭琴に興味を持ってもらえることを願っています。メインは演奏ですが、バックスクリーンにモンゴルの景色を映し出せたらと考えています。また、秋をイメージした日本の曲を演奏しようと思っています。大人の方にも聞いていただきたいです。

これからの国際交流への思いを聞かせてください。

川崎市と内モンゴルとで交流していけたら嬉しいです。今回のコンサートでも入場口にモンゴルの民族衣装を飾ったり、着てもらったりできたらと思案中です。この交流がこれからもずっと続いていくことを願っています。



楽しいお話をありがとうございました。内モンゴルで5歳から馬に乗って生活していたセーンジャーさん。彼の馬頭琴の演奏は、自然の豊かな広がりの中から生まれ、育まれた資質が発揮されているはず。そしてコンサートに来た方々は、モンゴルの大草原を渡っていく風の心を感じることができでしょう。

(写真提供:セーンジャーさん  
取材・文:編集ボランティア  
相沢明子、青柳尚子)

※コンサートチケット申し込み方法は7ページ参照